

児童の自立と協働を促す教員の在り方

—通学合宿と学校教育を結びつける視点から—

松本 歩（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

原田 純治（長崎大学大学院教育学研究科）

本実践研究では、すべての児童の自立・協働の力を育むために、社会教育の一環である通学合宿を学校教育で何らかの形で実践するというのが目的である。まず、自立については、家庭において自立チャレンジノートに取り組む。通学合宿のプログラム要素となっている「自分で時間を決めて行動する」などのチャレンジ目標を6つの中から選択し、具体目標をたて、実践を行い、保護者のサインをもらい、振り返りを行うという流れで実施した。次に、協働については、学校においてソーシャルスキル・トレーニング（以下 SST という）に取り組む。毎週朝の時間 15 分を用いて、学級の状況を見ながら計 10 回の実践を行った。結果として、数値として期待する効果は得られなかったが、学校教育においても保護者の方の協力なしでは、すべての子どもに自立・協働の力を付けることが難しいこと、SST は対人関係が出来上がった集団への介入は難しく、学級状況を知るための手段として有効であることが示唆された。

キーワード：自立・協働，SST，通学合宿

1. 通学合宿

通学合宿とは「異年齢の子どもが、地域の方々の協力を得ながら、3～7日程度、公民館などに寝泊まりし、炊事・掃除などの生活体験を行いながら、学校に通学する活動」である。通学合宿において、子どもは衣食住にかかわる生活の技能や、お互いの立場や役割を理解し、力を合わせてよりよく生活する技能を高めることができる。また、「思い通りに行かない経験」の中で仲間と共に暮らす喜びや、苦しみを味わうことができる。つまり、通学合宿では子どもの自立・協働の力を身に付けさせることができると言える。

本研究における、自立・協働を定義づける。自立とは、「自己実現を図っていくために、生活技能を身に付け、自らの生活習慣を管理できる力」である。協働とは、「自立が基盤となりよりよく生きるために、他者と交わり、その中で自分の良さを生かしていくことのできる力」である。児童には、「自分のやりたいことをするためには、自分のことは自分でできるようになろう」「一人では生きていけないから、周りの人と協力して、自分の良さを生かしていこう」という目標の下で、実践を行う(図1)。

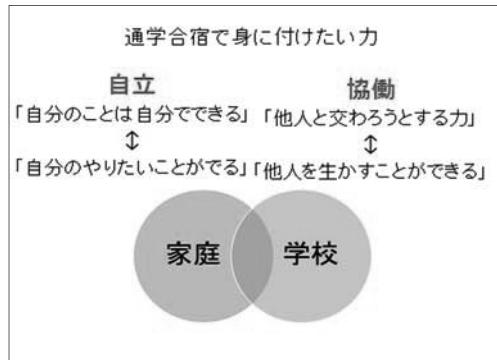


図1 通学合宿で身に付けたい力

また、通学合宿は子どもの生活知（日常生活を送るための知識や技術に関する知恵）を高めるのみならず、家庭にとって子育てを見つめなおす期間となり、地域においても子どもが核となり地域の絆を取り戻し、結びつきを強めるという効果があると期待されている。

通学合宿は35年ほど前から始まり、全国で取り組みが広がっている。本県においても、平成27年度は、23の団体で実施されている。

2. 目的と方法

学校生活における児童の自立・協働の態度及び行動についての実態を把握し、児童の協働を促すSSTを行いその効果を検討すること、また教員がどのような自立・協働を促す支援を行っているのか観察し、どのような支援が効果的であるかについて明らかにすることを目的とする。加えて、家庭の協力を得て、通学合宿で身に付けるべき自立に関するSSTを日々の生活に組み込む方法を検討する。学校においては、協働を促すSSTなどを行い、どのような変容があるかを検証する。

3. 実践活動

〈自立について〉

自立チャレンジノート①

自立チャレンジノート①(図2)に取り組む。児童は、6週間かけて、全てのチャレンジ目標に取り組む。実習日に回収し、取り組み状況を確認し、コメントを書いて返却する。6つの自立チャレンジ目標については、児童の生活課題と、通学合宿のスケジュールから要素を抜き出し、選定した。

- ① 自分で時間を決めて行動する
- ② お家の人と料理をする
- ③ 一人で買い物に行く
- ④ お家をピカピカにする
- ⑤ 身に着けるものをきれいにする
- ⑥ 身のまわりを整とんする

| 自立チャレンジ・ノート | | | | | |
|------------------------------------------------|-----------|-------|--------|----------|-------------|
| 【書き方の例】 | | | | | |
| 自立チャレンジ目標 | 私のチャレンジ目標 | ふりかえり | できたマーク | お家の人のサイン | 松本先生からのひとこと |
| <input checked="" type="checkbox"/> お家をピカピカにする | | | | | |
| ----- | | | | | |
| 自立チャレンジ目標 | 私のチャレンジ目標 | ふりかえり | できたマーク | お家の人のサイン | 松本先生からのひとこと |
| <input type="checkbox"/> 自分で時間を決めて行動する | | | | | |
| <input type="checkbox"/> お家の人と料理する | | | | | |

図2 自立チャレンジノート①

チャレンジ目標を選び、「私のチャレンジ目標」で具体的な目標を立てることができていた。例えば、「自分で時間を決めて生活する」では、「家に帰ったら宿題を終わらせる」「ゲームの時間を1時間以内にする」「9時に寝て、7時に起きる」などである。具体的に目標を立てることができていない児童については、「お家をピカピカにする」では、場所を限定し、回数を決めるなどのアドバイスを行った。チャレンジノートを返却する際に、具体的な目標を設定するように声かけができた。「ふりかえり」では、「毎日やってみて大変だった」「さぼってしまった」などの記述があった。また、「お家の人と調理をする」「一人で買い物に行く」については、お家の人の都合により、実践ができなかったという記述もあった。「できたマーク」については、各人や目標によってバラバラであった。保護者のサインについて、ほとんどの児童が自分で記入しており、保護者の協力がどれだけ得られたかは定かではない。中には、サインとともに「助かった」などのコメントをしてくれる保護者もいた。「松本先生（第一著者）からのひとこと」については、取り組みを評価したり、「大変だった」などの思いに共感したり、次回への励ましの言葉を書くようにした。全体的な印象として、提出時にあわせて記入しており、確実に実践できたかは不明である。もっと、実践が確かなものとなるよう、保護者の方と連携をするべきであった。また、児童に対してチャレンジノートの目的を理解してもらい、実践に臨むべきだったと考える。また、児童による取り組みの差が大きかったように感じる。もっと一人ひとりに適したチャレンジノートを作成すべきであった。

自立チャレンジノート②

自立チャレンジノート②に取り組む。児童は4週間かけて、できるだけ多くの項目を達成できるように実践する。実習日に回収して、5回達成できたものについては、シールをはり、他の項目に取り組むように促す（図3）。

自立チャレンジノート II

番 名前 ()

自分ができるチャレンジの□に色をぬってください。□を5こ選んだらシールを貼ってください。
いちばんチャレンジをしてシールをたくさん集めよう！！

| チャレンジ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | シール |
|---------------------|---|---|---|---|---|-----|
| 目覚ましをかけて自分で起きる | | | | | | |
| 家に帰ってまず宿題をする | | | | | | |
| テレビ・ゲームの時間は1時間以内にする | | | | | | |
| 明日の準備をして寝る | | | | | | |
| 自分の決めた時間にふとんに入る | | | | | | |
| 遅刻しない | | | | | | |
| お家の人とたくさん話をする | | | | | | |
| 朝ご飯を食べる | | | | | | |
| お皿をならべる | | | | | | |
| お家の人と一緒に料理をする | | | | | | |
| 自分一人で料理にチャレンジする | | | | | | |
| お皿をあらう | | | | | | |
| お米をどく | | | | | | |
| 配膳をする | | | | | | |
| お家の人と買い物に行く | | | | | | |
| おつかいをする | | | | | | |
| お風呂そうじをする | | | | | | |
| 机をふく | | | | | | |
| そうじきをかける | | | | | | |
| ゆかをふく | | | | | | |
| トイレそうじをする | | | | | | |
| シューズをあらう | | | | | | |
| 給食室にアイロンをかける | | | | | | |
| 洗濯機に洗濯物をいれる | | | | | | |
| 洗濯物をすす | | | | | | |
| 洗濯物をたたむ | | | | | | |

図 3 自立チャレンジノート②

自立チャレンジノート②に取り組む前に、自立チャレンジノート①の振り返りを行い、もう一度、目的などを理解できるように説明を行った。チャレンジノート返却時に、活動の内容を問い、実際にできたかを確認することによって、他のチャレンジを促すことができた。チャレンジノート①に比べ、簡単なチャレンジ項目を前半でほとんどの児童がクリアしていたことから、取り組みへのモチベーションがあがったと考えられる。

〈協働について〉

朝の時間（15分）の中で、まずは「みんなで楽しく協力する」という目的で活動を行うこと、先生の話をしっかり聞く、他人が嫌がることをしない・言わないという約束事を確認した。実践は、毎回、活動の説明、活動、振り返りシート（図4）の記入という流れで行った。SSTの選定は、クラスの状況を見ながら、難易度や流れを考えて行った。なお、児童は昨年度、SSTを定期的に行なっていたため、活動にスムーズに入ることができた。同じ内容を活動に取り入れることによって、昨年度と今の状況を児童自身が振り返られるようにした。

| | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>ラインナップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ① キャッチ ② フープリレー ③ バナナ鬼 ④ 新聞パズル ⑤ ハブユーエバー ⑥ 宇宙旅行 ⑦ たまちゃんの願い ⑧ アサーション ⑩ UFO 着陸 | <p>ふりかえりシート ()月()日 名前()</p> <p>あてはまるところに○をつけましょう</p> <p>①協力して活動することができましたか？</p> <p>よくできた できた あまりできなかった できなかった</p> <p>②友だちのいいところがみつかりましたか？</p> <p>よくみつかった みつかった あまりみつからなかった みつからなかった</p> <p>③自分のいいところがみつかりましたか？</p> <p>よくみつかった みつかった あまりみつからなかった みつからなかった</p> <p>活動して思ったことを書きましょう</p> <div style="border: 1px solid black; height: 60px; width: 100%;"></div> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図 4 ふりかえりシート

以上のように、SSTを実施して、目的であった「みんなで楽しく協力する」ということを全員に実感してもらうことはできなかった。SSTは学級において、みんながルールを守り、安心して発言や活動できる基盤がないと難しく、逆効果に

なる場合もあるということがわかった。このクラスの児童たちは、前の学年からの持ち上がりである。対人関係は以前からできあがっている。好き・嫌いや勢力の関係もかなり固定化している。その段階に至った状態で、嫌いな友人や疎遠な関係にある友人と「協働」の大切さを SST を通して実感させることの困難さを感じた。一旦関係性ができた集団で SST を行うことの困難さが示唆された。一方で、SST が最も効果を発揮できるのは、関係性の初期であることも示唆された。しかし、ネガティブな関係性ができた集団でこそ SST を行い「協働」の大切さを再認識させる契機が得られるのかも知れない。それには、種類の異なる SST のメニューを蓄積することも重要だが、ある程度の期間一つの種類の SST を行い、児童たちが失敗の経験から「協働」の重要さを実感し、徐々に改善を目指すのも一つの方途として考えられる。

今回毎回異なるメニューの SST を行ったが、毎回の導入の段階で、毎回の SST が共通して「協働」に関わる内容であることを意図的に強調して伝えることによって、SST のねらいをしっかりと把握して取り組みができたかも知れない。

限られた SST の中で突発的に行うのではなく、豊富な SST の中から、学級の状況や、行事に合わせ選択して行う必要があると感じた。また、SST は学級の雰囲気や、行事に合わせ選択して行う必要があると感じた。また、SST は学級の雰囲気や、行事に合わせ選択して行う必要があると感じた。また、SST は学級の雰囲気や、行事に合わせ選択して行う必要があると感じた。また、SST は学級の雰囲気や、行事に合わせ選択して行う必要があると感じた。

4. 考察

実践研究において、通学合宿のプログラムを細分化した活動を実施した。質問紙における実態把握の結果からは、介入後、期待する結果は得られなかった。しかし、実践を通して朝の活動の時間や、家庭科での調理実習を行うといった児童の学校での生活の様子や、活動の様子からは、児童が「自分のことは自分でやろう」とする姿や、学級が1つになって協力して行事に臨む姿が見られた。また、思い通りにいかない経験を重ねることによって、うまく言葉が伝えられた時やチャレンジに成功した時、「協力する楽しさ」を知り、その中で、自分の良さを生かしていくことができるようになる。ある程度の対立的関係ができ上がった段階での SST による介入の困難さを感じられた。しかしながら、一方では、そのような状態であるからこそ SST を行い、児童らが対人関係の重要さに気づく動機づけの機能をもつかも知れない。それをきっかけに「なんとかしなくては」という方向への動きが見出せるならば、SST の積極的な機能が見出せることになるだろう。

本研究の一番の課題となったのは、保護者との連携・協力である。今回は、家庭での実践をお願いするだけの一方向的な実践になってしまったので、保護者と考えを共有する場を設け、同じ方向を向いて、連携・協力を進めていく必要がある。

5. 今後の課題

本研究は、児童に自立・協働の力を付けるための通学合宿を学校教育で行える形で実践した。よって、通学合宿のキーワードである、「地域」について全くふれることはできなかった。学校教育で全ての子どもにという思いからスタートしたが、そこには、全ての子どもと、子どもと一緒に実践をしてくれる保護者という前提が私自身の中にあったのかもしれない。保護者の協力が得られない子どもこそ、学校・地域が全力でサポートしていかなければならない。子どもとともに保護者の方への支援が必要となるが、そこまで、1人の担任や学校では担いきれない。

近年、学校・地域・家庭の連携・協力が見直され、「地域に開かれた学校」というものが注目されている。「コミュニティー・スクール」といった考え方もあり、保護者の方や、地域の方が学校に入ってきて、「子どもの育ち」を見守って下さっている。そのような動きの中で、学校教育と社会教育が同じグラウンドで、子どもを核に据え、学校、家庭、地域のすべての人が「学校の存在価値」について見つめ直し、地域が元気になるような取り組みをしていってほしい。

引用・参考文献

- 甲斐崎博史(2013). クラス全員がひとつになる学級ゲーム&アクティビティ 100
ナツメ社
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター(2007). 地域における「通学合宿」
の実態に関する調査研究報告書
- 国立青少年教育振興機構(2010). 事業評価に使える! 「生きる力」の測定・分析
ツール
- 小林正幸・宮前義和(2007). 子どもの対人スキルサポートガイド—感情表現を豊
かにするSST 金剛出版
- プロジェクトアドベンチャージャパン(2005). クラスの人間関係がぐ〜んとよ
くなる楽しい活動集—信頼と安心を築くプロジェクトアドベンチャー
学事出版
- 正平辰男(2005). 通学合宿・生活経験の勧め—お分かりですか? 「子どもはやった
ことのないことは、できない」ということを あいり出版
- 正平辰男・永田 誠・相戸晴子(2010). 子どもの育ちと生活体験の輝き—これまで
の通学合宿これからの通学合宿 あいり出版